



学校だより

みどりの

10月号

一人一人の笑顔輝くみどりっ子 ~私も大切 あなたも大切~

- 考え伝え合う子
- 心豊かな子
- 元気な子
- やりぬく子

令和8年10月1日

「主体性」を育てる

校長 大塚 恭子

校庭を吹き抜ける風に、少しずつ秋の深まりを感じる季節となりました。子どもたちが様々な活動に取り組む中で、できるようになったことが増えたり、これまでとは違った表情を見せたりする姿に日々の成長を感じています。

さて、「自主性」と「主体性」。どちらも、子どもたちの成長を考える上で大切な言葉です。しかし、似ているようで、同じ意味ではありません。

「自主性」とは、決められたことややるべきことに、自ら進んで行動することです。教師に言われなくても進んで掃除をする、明日の準備を自分からするなど、これにあたります。一方、「主体性」とは、自分で考え、判断し、行動することです。

先日行われた「ギネスに挑戦」では、各クラス（3年生以上）が工夫を凝らし、自分たちで学習に関連した種目を考え、準備を進めていました。もちろん、要所要所では教師の適切な支援は必要です。「どうしたら、1、2年生も楽しめるかな。」「こうしたら、もっと面白くなるのでは。」と仲間と話し合い、やってみる。うまくいかなければ、そこで立ち止まって考え直して、もう一度やってみる。そんな子どもたちの姿が、そこにはありました。私は、この姿に「主体性」が表れていると感じました。

教育学者のデューイは、「為すことによって学ぶ」という考え方を重視しました。この考え方は、「ギネスに挑戦」のような学習指導要領に示されている「特別活動」とも深く関わっています。「特別活動」では、子どもたちが実際に人と関わり、考え、行動することを通して、その経験から学んでいきます。教師から答えを与えられるのではなく、自分たちで試行錯誤しながら活動するからこそ、そこにはうまくいった経験だけでなく、失敗した経験も生まれます。失敗には、机上の学習では味わうことのできない悔しさや痛みを伴うこともあります。がっかりした表情で、教師に報告しに来る子どももいます。そんなとき、「大丈夫、必ずできるよ。」

「このやり方ではうまくいかなかったことがわかったということだね。」と、教師がその経験を肯定的に受け止め、励ます。この言葉から安心感を得た子どもは、「もう一度やってみよう。」と、再び挑戦することが出来ます。



秋は実りの季節です。これまでの経験を糧に、子どもたちが新たなことに挑戦し、仲間と考え、失敗から学びながら、一人一人の「やってみたい」を「やってみよう」に変えていく。そんな実りある学校生活を、これからも大切にしていきたいと思います。